



八千代市郷土歴史研究会
会長 村田一男
事務局 八千代市勝田台 3-24-10 牧野方

=お知らせ=

8月24日(日) 8月例会

- ・午後1時～4時 八千代市立郷土博物館
- ・情報交換、打合せ

.....

9月7日(日) 拡大役員会 & 例会

- ・場所は午前・午後とも八千代市立郷土博物館
- ・午前10時～12時 **拡大役員会**
- ・「史談八千代」33号原稿締切・内容調整
役員・原稿執筆者は必ずご出席ください

- ・午後1時～4時 **例会**
- ・「史談八千代」33号の概要紹介
- ・展示の企画、調整、分担の確認
会員は全員ご出席ください

.....

10月5日(日) 例会

- ・午後1時～4時 八千代市立郷土博物館
- ・「史談八千代」33号校正 展示作品の調整

.....

10月26日(日) 例会

- ・午後1時～4時 八千代市立郷土博物館
- ・「史談八千代」33号最終校正

.....

11月16日(日) 例会

- ・午前9時～4時 八千代市立郷土博物館
- ・文化祭展示の制作を全員で行います

.....

有志による白井家文書解読

研究日程 第1・第3木曜日 第2・第4水曜日
八千代市立郷土博物館にて(詳細は会長まで)

八千代市民文化祭

ふるさとの歴史展

テーマ

「平戸の○○...□□」

□□□.....

□□□.....紹介します。

と き：11月29日(土) 午後1時～5時
30日(日) 午前9時～午後4時

ところ：勝田台文化プラザ 2階展示室
設営準備は、29日会場にて午前9時から開始

=報 告=

5月17日(土) 5月例会報告

平戸地区フィールドワーク

小菅 俊雄

5月17日(土)午後、本年度の研究対象である、平戸村の2回目の現地学習が初夏のさわやかな現地で行われた。

参加者のうち、緑ヶ丘駅からの「バス」利用組がバスの道路渋滞による遅れで30分ほど遅れて集合場所のバス停「平戸入口」に、待ちかねていた現地直行組と合流する。

総員20名、スーパーエフマートの脇に集合、今日の資料を頂く、会長の挨拶、市教育委常松氏を紹介された後、出発する。道を南に150mほど行くと三叉路にでる、東に分かれる道の両側、とくに南側には沢山の庚申塔や馬頭観音などの石塔群が整然と安置されている、ここで滝口さんから、三叉路からの道のつながりと小字について地名からの解説をしていただく。北側の道祖神の後ろあたりが平戸台古墳群の9号の塚があったあたりとの説明を常松氏より聞く。ここより道を南に少し下ってから、丁字路を西に向かう、熱田大

明神の敷地内にある「平戸やすらぎの家」の前にある印旛沼開削の功労者である「植草兵左衛門の顕彰碑」や「土地改良記念碑」をみる。

「平戸やすらぎの家」から西へ少しゆくと今は整地されているが、平戸台 2 号墳があった場所にする、常松氏より、墳丘が昭和 52 年ころまで確認されたが、その後整地され納屋がたっていたが、納屋の立替のとき、石棺が確認されたため平成 9 年と 11 年に調査が行われたとの経緯と、石棺内の遺物について説明がなされた。その後、畑の中の道西南の方向に歩いて、現在発掘調査中の平戸台 8 号墳に向かう、森の中に発掘現場がある。



資材置き場埋め立て工事のため緊急発掘調査中で方形の周溝に円形の墳丘があり、墳丘の下に石棺が発見され、現在調査を進めているところであるとの説明を聞く、土器の破片が沢山目につく。また池田会員より終戦前後の間見穴にあった古墳についての思い出を聞く。

元の道に戻り、道地にある村の墓地をたずねる、台地の西端崖際に並んでいて、道から小道を登ってゆく、そののぼり口のところに「六道の辻」といわれる葬儀の際に蠟燭を灯す小さな板の台が置かれていた。

崖の上には立派に整理された墓地群があるが、なかには現在消息のわからない家もあり、墓地も整理されず石塔がいくつか立っているだけのところがあり、そこに板碑が 2 枚立てられてあった、もとは 3 枚あったよし。佐久間会員から俳人東川の墓について説明をきく。

台地上は一带が畑で、良く整地されている。

常松氏よりこの台地から推定される、平戸台 1・4・5 号墳の位置の説明があった。また小道を下り元の道路にする。南に下り植草家の立派な門

の前を歩いて富沢和子家へ向かう。

富沢家の裏庭に出て、崖下に祀られている屋敷神の石祠 4 基（天神様ほか 3 基）の前で和子さんから屋敷神の由来など昔話を伺う。

石祠の詳細な調査は後日とする。

4 時ころ富沢家の前で解散、各自家路につく。

6 月 14 日～15 日 研修旅行

佛都・会津地方歴史探訪の報告

酒井正男

梅雨の合間の晴天にめぐまれ、今年の見学旅行会は平成 20 年 6 月 14 日・15 日に 16 名(会長は公用のためホテルへ直行)の参加のもと京成勝田台駅北口を早朝 7 時に出発しました。

奈良・京都・鎌倉・平泉と並ぶ佛都と称された全国的にも歴史を重ねた珍しい佛都会津地方への旅に胸躍らせ、途中東北道の佐野 S A（8 時 50 分着）などで休憩を取り、会津鉄道の茅葺きの駅舎、塔の峯（へつり）の謂われなどの説明を聞きながら 12 時近く最初の見学地大内宿に着きました。まずは腹ごしらえ、話の種になればと幹事の取り計らいで三澤屋の囲炉裏での長ねぎを箸として「ねぎそば」を食す。そば、味付けとも中々のものでした。



大内宿

大内宿は、日光今市から会津若松に通じる旧会津西街道の宿場。旧街道は明治になって水路が真ん中から両脇へ移動し山の湧き水がひかれ、茅葺き屋根の宿や店が建ち並び電線のない広々とした町並になり多くの観光客で賑わっていました。宿場の裏山子安観音横からは茅葺きの屋並が一

望でき素晴らしかった。

次に会津若松市のシンボルでもある鶴ヶ城(若松城) 天守閣を訪れた。今から 610 年ほど前芦名直盛が東黒川館を築いたのが始まりといわれていて、幾多の変遷を経て悲劇で幕を閉じた名城として知られている。

一時と云えども伊達政宗が会津入りした事に驚かされた。戊辰戦争では約一ヶ月の激しい攻防戦に耐え難攻不落の城であることを世に示しました。明治政府の命令で取り壊されたが、昭和 40 年に再建し、平成 16 年にはリニューアルして、お城ミュージアムに大変身しました。やはり古城は石垣に心がひかれ、自然と人工の調和、力学的な技術と見せるための意匠の巧みさをほどよく表現している「打ち込みハギ」の積み方には感動的でした。

鶴ヶ城の真正面にある会津酒造博物館(焼酎資料館併設)に立ち寄り、きき酒コーナーで地酒に舌鼓を打ち今日最後の見学地飯盛山に向かいました。鶴ヶ城の北東飯盛山の中腹にある白虎隊十九士の墓は、戊辰戦争で戦った 16 才から 17 才の少年達で火に包まれた城を望みながら若い命を散らしました。下山途中にある会津さざえ堂(国重文)は飯盛山正宗寺の江戸中期の六角三層の仏堂で上り下りから施状になっていて同じところを通らず見物できる世界的にも珍しい独特なものです。

近くに弁天様が祀られ猪苗代湖の水を会津盆地に引く戸ノ口堰洞窟があり大量の水で満たされていました。この洞窟の水量が少ない秋、ここから飯盛山へ白虎隊が逃げてきたそうです。初日はこれで見学は終了し今回の宿泊地である東山温泉に向かい 17 時 12 分東山グランドホテルに到着しました。

夕食は会長の到着が今朝 8 時 43 分ごろの岩手・宮城内陸地震の影響で遅れるのではと懸念されましたが、予定どおり 19 時から会長も合流して盛大に行われ、その後一階ロビーで、アトラクションの白虎隊日舞を見学しました。恒例の学習会は副会長と佐久間会員による八千代市内にある安積(あさか)開墾に従事した旧久留米藩士の墓石に関連して、明治のはじめに行われ郡山発展に寄与した安積疎水と開拓の歴史を勉強して明日の郡山見学に備えました。

中田観音(普門山 弘安寺)

会津坂下(ばんげ)町から高田街道に分け入り会津美里町米田の奥まった木立に囲まれて中田観音があります。鎌倉時代中期の作高さ 2 m の銅造の尊像(国重文)は、奈良・長谷寺の十一面観音を模したといわれる優美な姿をしています。野口英世の母・シカが篤く信仰を寄せたことも知られています。

立木観音(金塔山 惠隆寺)

会津坂下町 49 号国道の西方越後寄りの塔寺惠隆寺観音堂があります。国重文の本尊十一面千手観音(8.5m)があり、ケヤキ材の一木造りで国内最大と云われている。立木観音の呼び名そのままに、立っている木に直接仏の姿を彫り込んだと伝えられています。

この像を中心に雷神・風神などの仏像が醸し出す世界は心を魅了して離しませんでした。

鳥越観音(金剛山 如法寺)

越後と会津の境の町野沢。昔、宿場の町として賑わいました。鳥獣害による不作の貧苦と悲嘆にくれる農夫に、憐れみをかけ念持仏である一寸八分の聖観音の尊像を授けられ、その靈験は著しく「鳥越観音」と尊称されています。大同二年(807)に徳一大師が創建した名利。珍しい東西向き拝口(三方出入口)で、東から入り西から出ると西方浄土へころりと安楽往生がかなうと云われています。向拝の周囲に見事な彫刻が飾られ、なかでも東口の三猿(かくれ猿・のがれ猿・暮らし猿)はそれぞれ隠し彫りでこれを探すと願い事が叶うと云われている。境内の樹齢 1200 年の高野槇が勇壮に聳える姿に感動しました。

次に、会津柳津の圓蔵寺、麓の内田屋にて遅い中食をとり境内へ。靈巖山圓蔵寺は弘法大師が靈木で刻んだ福満虚空蔵尊を徳一上人が堂を建て祀ったと伝承され、日本三虚空蔵尊の中でも随一と云われる。

他の二虚空蔵尊は、能満虚空蔵尊(千葉県千光山清澄山)と大満虚空蔵尊(茨城県村松山日光寺)といわれる。

十三講(十三詣り)の行事(4月13日から5月13日)が執り行われている。十三詣りとは、十三才の童男童女が虚空蔵尊に参詣する行事で「智慧詣り」とも云う。この十三才と云う年代は「幼年から大人」に変わる時期で昔の元服の頃に

重なります。私の田舎でも十三詣りの行事があり友達と連れ立って子供だけで村松山日光寺に行った昔を思い出し懐かしみにしたった。

奥之院弁天堂、宝物殿など見学して最後の見学地の郡山に向かいました。郡山発展の原動力となった安積開拓の歴史を尋ねて明治7年に建設された擬洋風三層楼の開成館（県指定重文）などを案内ボランティア菅野さんに安積開拓に携わった人々の足跡が分かる資料や関心深い開拓の歴史などについて案内してもらうことができた。

因みに「開成」という呼び名は「開物成務」（人知を開発し事業を成しとげる）から取ったものとの説明がありました。

最後に、安積歴史博物館を訪ねる。県立安積高等学校創立 100 年記念行事の一つとして開設されました。明治 19 年福島県の中心的な中等教育機関となり唯一の福島県尋常中学校は安積開拓の地に生まれ育ちました。館内の展示方法は、各教室をテーマごとに陳列し現在に至るまでの世紀を超える教育のあゆみを考えて見るところです。時間の都合上駆け足の見学になってしまいました。



安積歴史博物館

郡山の見学はこれで終了することになり一路勝田台に向かいました。帰着時間が今までになく一番遅くなるのではとのこと。20時05分に無事勝田台に到着しました。

佛都会津若松地方での千年の時空を超えた歴史を堪能できた一泊二日の研修旅行になりました。素晴らしい研修旅行を設定していただいた会長・副会長・安藤さんの方々に感謝いたします。

7月20日（日）

7月例会報告

午後1時～4時半 市郷土博物館学習室にて

出席：26名

1. 故吉橋清会員(7月12日死去)へ黙祷
2. 新入会員紹介 (会員消息参照)
3. 旧大和田新田の総合研究
 - (1)白井富美子家文書の解読研究 (関和・菅野)
 - (2)八千代工業団地の研究 (佐藤二)
 - (3)塚集成 (村田)
 - (4)村入用「飯差籠」について (関和)
 - (5)32番札所「大教院」について (平塚)
4. 旧平戸村の総合研究
 - (1)地名研究 「平戸」の考察 (滝口)
 - (2)平戸の石造物 (小菅)
 - (3)富澤和子家文書の解読
 - ①五人組帳書式雛形 (菅野)
 - ②訴訟の流れ「平戸村一件訴訟答写」 (酒井)
 - ③富澤家『最上流大塚算法記』 (佐久間)
 - (4)富澤家の氏神 (村田)
「筆道 守護 天満大自在天」碑
 - (5)氏神一覧 (小林)
 - (6)太平洋戦争遺跡 (牧野)
 - (7)埋蔵文化財調査 (蔵)
 - (8)民俗行事 (蔵)
 - (9)八千代における献穀奉納について (田村)
 - (10)寺子屋「小林徳次郎先生について」 (板倉)
5. 市民文化祭展示プラン
 - (1)平成20年度市民文化祭
ふるさとの歴史展のテーマなど (牧野)
 - (2)『史談八千代第33号』編集プラン
原稿締め切り 9月7日(日)
最終校正 10月26日(日)
6. 資料配布
 - ・「7月21日平戸台8号墳現地学習会へのお誘い」
 - ・「上座を訪ねる」
 - ・「一流舎東川報告要旨」

【記録：佐久間】

速報レポート

島田台の題目塔道標が仮移転 & 新たに地中から新道標を発掘 佐久間 弘文

木下街道の睦中学校付近に「南無妙法蓮華經」そして「丸山里祐」という人物の追悼文が彫られた道標があったことは既報のとおり(『八千代の道しるべ』のI06及び通信31号参照)ですが、県道の拡幅工事があれば存在が危ぶまれていました。しかしついに工事着工、このことを松本会員がメールで通知してくれました。

このため7月3日現地を訪ね、工事責任者から事情を聞いたところ、I06道標は工事会社に仮移転、そして同地周辺の地中から「馬頭観世音」銘の道標も発掘し会社に保管してあることを聞きました。同時に人骨・陶器破片らしきものも出土したため、当日午後から佐山妙福寺住職に依頼し、供養を行なう旨を知りました。



ちょうど古文書調査の会員が博物館で研究中だったので、会長・副会長・博物館員を含め計10名が参列させてもらい、工事会社社長、工事関係者多数も見守るなか住職による懇ろな供養が行なわれました。

のち佐山の工事会社を訪れ、搬出したI06の題目塔道標と、地中から発掘された馬頭観世音道標をつぶさに観察することができました。

写真のとおり、高さ84・横27・幅15cmで銘文は明瞭、文政11年(1828)の造立で、左右側面に船橋・鎌ヶ谷の方向が示されています。(写真提供は関和さん)

仮移転された道標2基は、県と八千代市の協議によって新設置場所が決まると思われますが、工事会社の(株)蛭間興業社長、同工事関係者の文化財への理解に感謝したいと思います。

現地での供養地中から掘り出された道標



(左側)

(正面)

(右側)

同じ工事現場から、何かの台座石と思われる石造物も掘り出されました。ほぼ50cm四方形、高さ20cmを超える強固な台石らしきもの。

特徴は上部の一部分が盛り上がり、その周囲が逆に10cmほど掘り下げられ、四辺のそれぞれにお線香を立てるような窪みが掘られています。

このような形状のものは当日の参加会員も首をひねるばかりでした。

ところが7月9日、これと酷似する石造物が「米本山長福寺」で発見されました。その模様は村田会長が以下のように伝えてくれました。

続いて 台座新発見の報告

7月9日(木)に平戸8号墳の発掘調査状況を白井家文書解読研究のメンバーで見学(蔵さんがHPで速報)に行った帰りに所要で米本山長福寺に立ち寄った。そこで山門前右手に上記の島田台で掘り出された台座と同じ形の台座を新発見し、一同は同様な台座がここにもあったことに歓声を上げた次第。

寸法は幅68・奥行61・高さ40。正面と両側面には結集者の村名と法名がびっしりと彫られている。

裏面には、「文化八辛未年 当山廿世心牛鉄印叟代 九月吉祥日 願主 加茂 豊充 世話人 鈴木定右エ門」の銘文あり。造立趣旨は不明。上部の平坦な作り出し部に関する造立物は見当たらない。島田台の台座に較べ、銘文がありより丁寧な作りである。

【村田一男】

両方の写真を並べてみます。

長福寺のもの(正面は右奥側)



島田台のもの(上部から撮影)



なお7月11日、長福寺の元住職(東堂)吉村武雄(ぶゆう)氏から以下の情報を頂きました。

- ①「この台座は、境内にあった「薬師堂」に置かれていた「薬師如来」の台座であった。
- ②「薬師如来は、戒壇石の更に右に積み重ねられている「有縁無縁供養墓集合塔(ピラミッドのように積んである墓)の頂上に移されている。如来様を移したとき、台石はあまりに重いのでこれを切り離れた。その名残が山門の壁際に置かれている台座である。

島田台のケースにあてはめると、掘り出された台座の上に鎮座されていた仏像がどこかにあるのかも知れません。

8月4日

平戸・植草家への訪問の報告

平成20年8月4日(月) 村田会長・牧野副会長・佐久間さん・蕨さんと田宮の5名で平戸研究の一環として午後1時30分から3時まで植草家を訪問した。

平戸・植草家の当主・植草せつ様の4代前の平戸村の植草兵左衛門は明治18年(1885)8月の大洪水を契機に、明治10年代～20年代にかけて印旛沼開削事業に携わっていた「織田完之」に協力を依頼して、地元の協力機運を高め、水害の被害を防止のために茶断ちをして開削事業を行なった人物である。現在も、その功績を称えて「植草兵左衛門の顕彰碑」が残されている。

植草せつ様のお話によれば、古文書等は処分してしまったのではないとの説明を受けたが、お位牌・過去帳を見せていただき、植草兵左衛門(戒名・実生院勇昌徳信士)・植草てい(戒名・禅生院妙厚弘徳信女)の没年も確認することができたことは成果である。仏間には植草兵左衛門の写真が飾られていた。

なお、天保年間に二宮尊徳(金次郎)が宿泊したとのことであったが、残念なことに宿泊した建物は現存していない。 【記録：田宮】

速報レポート

姿を現した平戸台8号墳

蕨 由美

5月例会報告で小菅会員が書いてくださったように、5月17日に平戸のフィールドワークの際、探訪した平戸台8号墳は、その後、発掘調査が8月上旬まで続けられ、多くの成果が得られています。

平戸台8号墳は、印旛沼に面する道地遺跡に点在する平戸台古墳群8基のうち、唯一、完全な姿をとどめていた古墳でした。この度、資材置き場として開発され消滅するにあたり、八千代市教育委員会による2008年4月末から緊急発掘調査が始まりました。

5月上旬の時点で、この古墳は墳丘径16m・周溝外径23mの小円墳、そして墳丘南側裾部に箱

式石棺の蓋石と見られる片岩が確認できました。

6月中旬、片岩の石棺蓋石は3~4枚、周溝の中から土師器壺と石棺の上あたりから須恵器が見つかり、また周溝に沿って、埋葬施設と思われる土坑3基を発掘中。6月18日、現地にお招きした大塚初重先生（明治大学名誉教授・古墳考古学の重鎮）のお話では、古墳後期6世紀後半~7世紀前葉に築造された市毛勲氏のいういわゆる「変則的古墳」であろうとのこと。霞ヶ浦~印旛沼の常総地域には、墳頂ではなく、このように墳丘の裾部に片岩を組み合わせた箱式石棺が設けられ、多人数の追葬を伴うという特徴をもつ群集墳が多くみられるとのことでした。

7月9日、いよいよ石棺が開けられる日がきました。八千代市の広報係や本会会員、むつみ街づくり研究会会員など多くのギャラリーが見守る中、蓋石が持ち上げられたのですが、石棺の側壁と蓋石の1枚が割れて隙間があり、そこから流入した土がたまっていて、内部は不明。でもその時の広報係のベストショットが、8月1日号「広報やちよ」の表紙を飾りました。

明けて10日、大塚先生が再度ご来蹟。この日も二十人以上の見学者が見守る中、石棺内部の土が除かれていくと、まず鉄鏃が現れ、続いて下肢部の骨と鉄刀が見えてきました。この感動のひと時、本会の会員も土運びや支えになる材木を調達するなどお手伝い、また、千数百年の眠りから白昼、人目にさらされた平戸のご先祖様に、大塚先生のご助言で線香とお茶を献じ、黙祷を捧げました。



2008.7.21 石棺内部

そして、7月21日に地元考古学グループの八千代栗谷遺跡研究会の現地学習会、27日に市教委主催の一般公開の現場説明会が開催され、2体以上の人骨、両脇に2振りの大刀が残されたままの石棺、周溝とそれに沿った土坑墓、また出土した

須恵器などを、多くの方々が見学しました。

地元平戸の方々、またネットで知って埼玉から来たという古墳研究者にとっても、人骨や副葬品がリアルに残る状態の現場説明会は、とても印象深く貴重な経験であったとお聞きしました。

さて、8月に入り棺内のすべての遺物を取り上げた後も、真夏の灼熱地獄の中、石棺を納めた土坑（掘り方）の発掘調査が続けられています。

7月27日の説明会と8月4日、平戸の旧家訪問調査に向いた際、現地で担当者に確認したデータは以下のとおりです。

- ・正式名：平戸台古墳群第8号墳
- ・形態：円墳
- ・規模：墳丘の径15~16.6m
墳丘の高さ80cm
周溝の外径21~23.3m
- ・時代：古墳後期 6世紀後半~7世紀前葉
- ・埋葬施設
主体部：墳丘南側裾部に箱式石棺
側壁4×2枚 小口2枚 床石5枚 蓋石4枚
石棺内部規模：長軸1.86m
短軸51~59cm
深さ51~53cm
周溝に沿って、北・南・南東に土坑3基
北側と南側土坑は、有天井土坑*
(*オーバーハングのある土坑)
北側土坑から短刀出土
南東側の土坑は木棺直葬墓と推定
- ・石棺内遺物：人骨 成人3体以上
子供1体以上
- ・副葬品：直刀2振り 鉄族10本
玉類（管玉・棗玉・ガラス玉）10点
- ・石棺外遺物：須恵器（石棺直上）
土師器（南側土坑そば）
- ・その他の遺構：ピット（縄文か）数基
墳丘下から竪穴住居（弥生時代）
周溝北側を切って幅1mの浅い溝跡2条

以上、連日の見学と取材に快諾いただいた調査担当者の常松成人氏に感謝いたします。

なお、隣接する平戸台2号墳と間見穴古墳群などを含めた考察は「史談八千代」33号で報告したいと思います。（2008.8.5記）

遺稿

「老いを生きて」

吉橋 清

郷土歴史研究とはすっかり疎遠になりましたが、いまは短期介護施設「ゆうかの里」でお世話になっています。手がかかる入所者に対して、スタッフの献身的な介護、特に夜間の当直には頭がさがります。

そんな中で、施設責任者の椎原久美子先生から、『ひかりの音が聞こえる』という詩集を読んでみてはと勧められ、読んでみました。

今年の日本自費出版文化賞の第二次選考に残った八千代市の「小谷野徹」さんの作品で、ALS(筋萎縮性側索硬化症)を発症した7年間で詩集に綴ったものです。

なぜ生きるのか、しかし生きる目的を知った人の苦労は必ず報われる苦労なのだ、と眼を見開いて何度も繰り返し読んでいます。

年の数は不足ないものの、私は死を目前に考えたことはなく、まだまだあまいと知らされました。それでもこれから一步一步死に近づいています。そんなときに備え、心を大きく、日常を大切にしたいと考えています。



吉橋清さん 2007.2.12 吉橋大師講フォーラムにて

—♪— 新入会員紹介 —♪—

池田 弘之 (佐倉市上座)

村杉スミ子 (佐倉市中志津)

よろしく!

会員訃報

吉橋 清 会員 (享年 90 歳)

平成 20 年 7 月 14 日逝去されました。

吉橋清氏が当会に入会されたのは昭和 56 年 (1981) 4 月 12 日に市原市の五井公民館で年度総会が開催されたときでありました。

吉橋清氏と当会との出会いは昭和 52 年 (1977) 12 月 3 日、文化財保護の会が当会と市教育委員会共催で「吉橋地区文化財調査報告会」を吉橋の花輪農村共同館で開催されたことでありました。吉橋氏は文化財調査報告会の開催準備中から熱心に協力してくださり、すぐさま「八千代市文化財保護の会」に入会されたことがきっかけで当会に入会された次第でした。

氏はまた熱心な吉橋大師詣りの実行者であり、札所の番号札を自ら打ち付けるなど社会貢献もされた根底には何よりも郷土を愛し、大事に未来へ伝えるというお気持ちがありました。

また貞福寺文書を書家に頼んで複製し、昨年 3 月には貞福寺に寄進されました。

氏は当会の例会活動にはいつも参加され、「八千代文章教室」会長をつとめ、ほかに和歌・俳句・社交ダンス活動も行い、さらにむつみ街づくり研究会にも参画され幅広い市民活動を展開され、どなたからも慕われた生涯学習の先駆者でありました。

こころからご冥福をお祈り申し上げます。

村田一男

左上の文章は、今は亡き吉橋清さんから、本年 6 月 23 日「郷土史研通信」用に編集担当に届いたものです。その 1 週間後の 6 月 30 日、吉橋さんは急に心臓の痛みを訴えられ、八千代医療センターに緊急入院。2 週間後の 7 月 14 日、ついに帰らぬ方となりました。八千代斎場で行われた 7 月 15 日の通夜・16 日の告別式には、多くの会員が参列し、吉橋さんを偲びました。吉橋さんの真剣な生き方をあらわすこの短文を、最後の遺稿として謹んで掲載いたします。

村田会長には、会員としての吉橋さんへの追悼文をお願いいたしました。 合掌。

編集担当 (蔵) sawarabi-y@nifty.com